様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年５月８日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520169
研究課題名（和文）古典古代学を基盤とした「東方予型論」の構築と可能性をめぐる研究

研究課題名（英文）Construction of the “Oriental Typology” and Research into its Possibility on the basis of Classical Studies

研究代表者　秋山　学（AKIYAMA MANABU）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：80231843

研究成果の概要：
聖書学の「予型論」を活用した本企画では，遠く東洋日本におけるキリスト教伝来以前の文化伝承のうちに「予型」を見出し，それを照射する「光源」としてビザンティン典礼を措定するという２段階での研究を推進した．代表者による慈雲尊者飲光の研究により，わが国の悉曇学あるいは習合神道のうちに一つの予型が，また分担者による『源氏物語』注釈史研究を通して，四辻善成のうちに実証主義的注釈家のあり方が見出されたと考える．

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,400,000	0	1,400,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：古典古代学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：古典古代学，東方予型論，ビザンティン典礼，華厳思想，バジリオ修道会，聖体論，古注釈，『河海抄』

１．研究開始当初の背景

本企画「古典古代学を基盤とした「東方予型論」の構築と可能性をめぐる研究」は，研究代表者秋山学により，平成 18～20 年度の 3 年間にわたり立案されたものであるが，これは，やはり秋山学を研究代表者として平成 15～17 年度に遂行された「東欧･スラブ諸国における西洋古典学の継承と展開」（基盤研究（Ｃ）一般）を承け，新たな視座とより広範な展望のもとに展開されたものである．

研究代表者秋山学は，2001 年における単著書『教父と古典解釈―予型論の射程―』（創文社刊，学位論文）の公刊以来，同著書にて提起されたさまざまな問題に対して多角的な視点から発展的研究を継続してきた．詳述するならば，著書における主要テーマ，すなわち東方ギリシア教父神学に顕著な「予型論」を，さらに広やかな視座から古典文献・古代文化の解釈に適用し，文化伝承一般に対する解釈学的刷新を図る一方で，その現代的展開のあり方を模索し，在外研究「ハンガリーにおける古典古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究」（2005 年度筑波大学国際連携プロジェクト・長期派遣）を経て，わが国の伝承文化に対する規範的な視座の確立を試みてきた．

特にこの間に展開された視座を挙げるならば，ギリシア語教会文献研究，「古典古代

学」領域の提唱，典礼学と聖体論などの専門研究の進展に加え，

（1）仏教・比較思想学関係：（e.g.「ギリシア教父と般若思想―東方典礼とアレクサンドリアのクレメンスを手がかりに―」，筑波大学文芸・言語学系紀要『文藝言語研究 文藝篇』44, 1-19, 2003.10，および「「三密」と「三位一体」―密教とビザンツ神学における「言葉」の位置と意義―」，筑波大学第二学群比較文化学類学術誌『比較文化研究』第2号, 13-20, 2006.3）.

（2）「東方予型論」の構想：（e.g.「ヘロドトスの「父性」―「東方予型論」の構築に向けて―」，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』48, 1-19, 2005.10）.

（3）アジア系言語であるハンガリー語を介しての対照・実践（e.g.「欧米文化研究におけるハンガリー語の意義―語順を中心に―」，城生佰太郎博士還暦記念論文集編集委員会編『実験音声学と一般言語学』580-589, 東京堂出版, 2006.7, および„Görög patrológia jelentősége és lehetősége Japánban ― Önéletrajzi emlékirat ―", *Athanasiana* 22, 91-107 (engl.res. 148-150), Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, Nyregyháza, Hungary 2006.2）

などがあった．本企画ではさらに，新たな研究分担者として日本文学者の吉森佳奈子を加え，西洋に発する古典古代学の解釈学的展開として位置づけられる「予型論」が，日本の古典文献に対していかなる具体的な有効性を実証し得るかを問うことを企図した．

２．研究の目的

上述のような背景の下に立案申請認可された本企画は，

１　西洋古典・中世古典語文献の基礎的研究.
２　ギリシア語教会文献の思想的・伝承史的研究.
３　中・東欧諸国，および同地域のギリシア・カトリック教会に関わる現代的研究.
４　セム語文献に関する実証的研究.
５　日本仏教を中心とする仏教文献の基礎的ならびに思想史的研究.
６　日本語文献の国際的客体化を視野に置いた，比較言語学的研究.
７　日本古典文学の伝承史的・解釈学的研究.
８　上記諸分野に関わる国際的レベルでの研究成果公表.

などをその遂行目的の内実としていたが，西洋古典文献を秋山が，日本古典文献を吉森が担当することは言うまでもなく，両分野の接点である仏教文献については，根源的にはサンスクリットによる印欧語文献であるとの認識に基づき，仏教語を西洋古典語との比較を通じて語源学的に措定することにより，仏教文化をより普遍的な文化史的地平に置きなおすことを考えた．そして人類の文化伝承一般を，古典古代学の理論に発する「予型論」の立場に基づいて意義付けることを究極目標とし，現在の国際的価値観となっている欧米の知的水準にもこれらの研究成果が受容されるよう，そして東洋の諸文化がより開かれた基準軸の許に置かれることを目的として，３年間のうちに国際的な場での発表をも精力的にこなすべく企図した．かくして本研究計画は，まずわが国の西洋古典学，日本文学，仏教・キリスト教をはじめとする諸思想史学などに広く裨益することばかりでなく，グローバル化が顕著な現代世界にあって，特に東洋諸古典文化の正しい位置づけのための有効な方法論として，諸宗教間の対話を促進し，また日本文化を正しく国際化する上で，大いに貢献することを目指したものである．

３．研究の方法

本研究企画の題目に含まれる「東方予型論」とは，代表者が単著『教父と古典解釈―予型論の射程―』以来取り組んでいる「予型論」を発展させたものである．「予型論」とは聖書学の一解釈理論であり，「旧約聖書に表された＜予型＞の意味は，後に到来する新約・福音の光により明らかにされる」という主張を意味する．その際の「予型」が旧約聖書に限られず，各文化圏で個々に見出される，とする神学を展開したのはギリシア教父たちであった．本企画では，教父によるこの理解を応用し，遠く東洋日本における近代以前，即ちキリスト教伝来以前の文化伝承のうちに独自の「予型」を見出し，その意義づけのために，特に東方キリスト教の伝承と神学を参照するという方法を採った．

以下細目を記すならば，

（1）まず古典古代学関係では，ヘロドトス，ウェルギリウスに加え，アリストテレスの包括的学問体系について研究を深めることを企図した（e.g.「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造―写本伝承活動と宇宙論的典礼を基点に―」，中世哲学会学会誌『中世思想研究』LI 掲載内定，入稿済み，2009.9（予定））.

（2）ギリシア語教会文献の思想的・伝承史的研究としては，ギリシア教父アレクサンドリアのクレメンスの邦語訳作業を継続して進行させたほか，特に大バジルの聖体礼儀式次第に着目して神学的考察を深化させた．

（3）中・東欧諸国，および同地域のギリシア・カトリック教会に関わる研究としては，2007 年春には四旬節を，2008 年春には復活節をハンガリー・ギリシア・カトリック教会の典礼に与かって実体験し，典礼式文の翻刻・注解を鋭意進めるとともに，新しい組織

改変などの根拠を教会法的に理解することに努めたほか，聖バジル修道会の沿革を内在的に究めるべく努力した．また，2006 年より 2008 年まで，毎年 6 月末に同国ケチケメート市にて行われるハンガリー教父学協会年次大会での口頭発表を継続して行った．

（4）日本仏教を中心とする仏教文献の基礎的ならびに思想史的研究としては，江戸時代後期の梵学者・習合神道家として一派をなす慈雲尊者飲光の研究を集中して行った．

（5）日本古典文学の伝承史的・解釈学的研究としては，『源氏物語』の古注釈史研究を継続する中で，古注釈・梗概書の歴史的相貌を捉える試みを鋭意行った．

４．研究成果

以下，平成 18 年度から 20 年度にかけて，年度ごとの成果をまとめる．

18 年度〕　キリスト教以前の諸文化伝承に関して，それが福音の到来を何らかの意味で予示すると解釈する視座は，教父神学の上で「予型論」とされる．これを「旧・新約」のみに限定せず，広く東方の文化伝承に適用して解釈する観点が，本課題における「東方予型論」である．ギリシア教父たちをめぐる内在的・方法論的省察，古代壁画の実例に照らした基本的概念の具体化とともに，西洋古典解釈への実践的適用，ビザンティンの伝承を担う共同体に即したその意味づけ等が初年度の研究成果であった．「予型論」的概念を広範に展開させるためには，ラテン教父よりもギリシア教父の世界観・宇宙観をその中心に据えるのが適切であり，ビザンティン典礼の奉献文にその具体的表現が求められる．またこの種の世界観は，福音到来以前の西洋古典にあってもすでに意識されており，そこへの着眼は『アエネイス』を読み解くための方法としても有効である．「東方予型論」は，仏教など東方の伝承文化をめぐる解釈に適用可能となるとき，その理論的妥当性が実証される．わが国への仏教の伝来以降，日本に既存する諸々の伝承は，仏教伝播の展開の上に位置づけられることになるが，種々の「仏教年代記」文書にはこの視点が顕著である．このような視座は，「予型論」的観点を受容するための前表として意義づけられよう．もっとも，福音の到来に先立って既存するこのような視座も，内在的真理の前にあらためて「予型」化され，生命の創造すなわち「復活」のエネルギーを受け容れるための「器」と化す．浄厳（1639-1702）や慈雲（1718-1804）らが大成させた悉曇学の伝承を西洋古典学の先駆けとして意義づけるとともに，仏教年代記を東方教会史の「器」とする視点を拓き得たことも，第 1 年度の大きな研究成果として挙げられよう．

19 年度〕第 2 年度は，1)「東方予型論」の理論的支柱としてのビザンティン典礼様式・暦の研究と明確化に努めるとともに，2)「東方予型論」の展開値として，わが国における悉曇の伝承および神仏習合の現象を，ここに位置づける試みを遂行した．以下，諸論文の骨子をまとめてみる．

(1) たとえば 2008 年初頭以降，ギリシア・カトリック教会（GK）が拡充整備の度を高めつつあるスロヴァキアでは，社会主義時代，18 年間にわたり同組織への激しい迫害が行われたが，これはある意味で，わが国の習合系寺院に対して明治初期に加えられた廃仏毀釈の現象と平行している．宗教的次元における地上での理想の追求は，国家主義的な思想統制が組織面にまで及ぶとき，まずもって激しい攻撃の対象となる．

（2）この場合の「地上での理想」とは，理念的な意味での普遍的共同体（カトリック教会／仏教）のもとに，地域的な特性を活かす実践形態（ビザンティン典礼／神道儀礼）を展開しようとする主張を表す．

(3) スロヴァキアの GK は，キリスト教初代教会が被った経験を 20 世紀において追体験したとも言われるが，もし（1）における両者の平行化が適切ならば，「本地垂迹」の現象は，日本への真なる福音到来に先立つ「東方の予型」として十分に位置づけられよう．

（4）キリスト教的福音の内実が，人間のもつ「神の像」性（創世記 1.26）の復興，すなわち共同体的次元・個的次元双方における「神性の許なる人性の一体化」（共同体化，＝受肉）というメッセージであるとすれば，神仏習合にもこれと同様のシェーマが適用できよう．

（5）肝要なのは，かつて復古神道が国家神道へと進み，領土拡張のための理論的道具と堕した過ちを繰り返さないためにも，その際の「神性」の場をつねに「他者」化しておくことである．すなわち，(2) における「普遍」の場は，つねに自らの外に求められるべきであり，その意味で人間は，不断の自己脱自を繰り返すべきだということである．

20 年度〕冒頭「研究成果の概要」にも記したとおり，本研究企画は，「予型」と「光源」という 2 段階にわたる探究を推進してきた．

（1）まず上記の意味での「予型」の研究として，代表者による論文「慈雲と華厳思想」および分担者による図書収録論文「『河海抄』の光源氏」がある．江戸後期の梵学者慈雲尊

者飲光は,『梵学津梁』により不朽の光を放つとともに，雲伝神道を唱導して神仏習合の学問的可能性を示した.「華厳経」は８世紀初頭に本邦に伝えられていたが，慈雲はこの華厳経に含まれる「十善戒」を，記紀解釈の基盤としても用いた．また賜姓源氏なる光君を親王として描き出すという特質を有する『河海抄』は，注釈者四辻善成による自身の悲願を反映する.

（2）一方「光源」をめぐる研究としては，代表者によるビザンティン典礼の式次第に関する一連の翻刻研究がある．本第３年度は聖体礼儀の聖バジル典礼に関して，その典文がバジル自身に遡りうるものであることから，古典古代学への有効な視座として活用されることを示した．また「聖週間」～「光の週」という，年間で最も重要な時期に関して，その典礼の次第を翻刻しつつ，多様性を呈するこの時期の朝課を理解するうえで，パラクリスという聖母のための祈祷文をその中心に据えることの有効性を提唱した．これら日々の典礼を支える聖人伝「メノロギオン」を完訳・翻刻するとともに，具体的な修道共同体（バジリオ会）の歴史的経緯をも探ることができた.

以上，慈雲のうちに古典古代学者を，また四辻善成のうちに実証主義的注釈家を見出す代表者・分担者の試みが，本企画を終了するに当たり「東方予型論」の基礎として据えられたと考えたい.

なお本企画の終了をまえに，平成 21～23 年度の 3 年間にわたり，本企画と同一の研究代表者・研究分担者計２名をメンバーとして，新たに基盤研究（C）により「古典古代学を基盤とした「東方予型論」による包括的学問体系の構築」を企画し交付の申請を行い，平成 21 年 4 月に内定通知を受けた．これは実質的に，本企画を継続させたものとして意義づけられる.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔Ａ　雑誌論文〕（計 13 件）

①秋山　学「聖バジリオ修道会の形成と展開―ハンガリーの場合を中心に―」，査読有，筑波大学大学院国際地域研究専攻紀要『地域研究』30, 99-118, 2009.5.

②秋山　学「ビザンティン典礼暦から読む帝政ローマ／ビザンツ帝国の歴史―古代学の源泉としての「メノロギオン」（2）―」，査読有，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　言語篇』55, 25-109, 2009.3.

③秋山　学「「聖週間」から「光の週」へ―「パラクリス」の意義づけに向けて―」，査読有，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』55, 19-157, 2009.3.

④秋山　学「慈雲と華厳思想―「古典古代学基礎論」のために―」，査読有，筑波大学人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』創刊号, 1-27, 2009.3.

⑤秋山　学「ビザンティン典礼による聖体礼儀の神学―聖バジル典礼をテキストに―」，査読有，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』54，27-81，2008.10.

⑥秋山　学「スロヴァキアの春―『東方教会法典』の規定と現代の「殉教者」たち―」，査読有，筑波大学人文・文化学群比較文化学類学術誌『比較文化研究』第 4 号, 49-65, 2008.3.

⑦秋山　学「ビザンティン典礼における「テュピコン」の神学―修道院典礼から司教区の典礼へ―」，査読無，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』53，53-105，2008.3.

⑧秋山　学「ビザンティン典礼暦から読む旧・新約聖書―古代学の源泉としての「メノロギオン」（１）―」，査読無，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』52，1-38，2007.10.

⑨秋山　学「伝承と国際性―ハンガリーのギリシア・カトリック教会―」，査読有，筑波大学第二学群比較文化学類学術誌『比較文化研究』第 3 号，26-36，2007.3.

⑩秋山　学「言語空間としてのエクフラシス（『アエネイス』第 1 巻）―『アエネイス』第 6 巻,『牧歌』第 4 巻との関連で―」，査読無，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究　文藝篇』51，57-83，2007.3.

⑪ Manabu AKIYAMA, ″"Typos" in the Works of Theodore of Mopsuestia", 査読有, *Patristica* 2，23-34, 新世社 2007.3.

⑫ Manabu AKIYAMA, ″ Soteriological Dimension in the Anaphora of the Liturgy of St. Basil ― in Light of the Eschatology of St. Gregory of Nyssa ―", 査読有, *Folia Athanasiana* 8 (2006)，97-112, 2007.2.

⑬秋山　学「聖バジル典礼における奉献文の神学的地平―ニュッサのグレゴリオス『人間創造論』解釈に向けて」，査読有,『エイコーン』第 34 号，44-64，2006.12.

〔学会発表〕（計 7 件）

①秋山　学「ビザンティン世界における「知」の共同体的構造―「不断の宇宙論」としての典礼を基点に―」（中世哲学会第 57 回大会シンポジウム「制度と学知」連動特別報告 1 およびパネリスト），於明治学院大学横浜校舎，2008.11.15,16.

②AKIYAMA Manabu, „Nagy Szent Bazil liturgiája és a „mindenség megújulása"", A Magyar Patrisztikai Társaság VIII. konferenciája („Orthodoxia és Heterodoxia", 2008. június 26- június 28), Kecskemét, Hungary 2008.6.28.
③ AKIYAMA Manabu, „Krisztus mint „egyetlen közvetítő" Aranyszájú Szent Jánosnál", A Magyar Patrisztikai Társaság VII. konferenciája („Aranyszájú Szent János: munkássága, kora és hatása", 2007. június 28- június 30), Kecskemét, Hungary 2007.6.29.
④秋山　学「システィーナ礼拝堂をめぐるローマ教皇史の 150 年（15/16 世紀）―典礼と暦を中心に―」（第 31 回地中海学会大会シンポジウム「二つのシスティーナ礼拝堂」パネリスト），於大塚国際美術館，2007.6.24.
⑤秋山　学「『アエネイス』におけるアスカニウス像の意味」，日本西洋古典学会第 58 回大会，於青山学院大学，2007.6.3.
⑥秋山　学「ハンガリーのギリシア・カトリック教会」，第 6 回東方キリスト教学会，於ホテル・ハイジ（長野県茅野市），2006.9.1.
⑦ AKIYAMA Manabu, „A tüposz Mopszvesztiai Teodórosznál", A Magyar Patrisztikai Társaság VI. konferenciája („Az egyház és a Szentírás", 2006. június 29- július 1), Kecskemét, Hungary 2006.7.1.

〔図書〕（計 6 件）
＜秋山 学＞
①秋山　学「書物が私を作った　アンケート回答 10「悉曇･梵学の伝承を基礎づける」」（『哲学の歴史』別巻「哲学と哲学史」p.344），中央公論新社，2008.8.
②秋山　学「慈雲『南海寄帰内法伝解纜鈔』の現代的意義―「動詞語根からの古典古代学」に向けて―」，筑波大学文化批評研究会編『テクストたちの旅程―移動と変容の中の文学―』，146-166，花書院，2008.2.
③秋山　学「ボエティウスと古代世界の終焉」（『哲学の歴史』２；内山勝利責任編集「帝国と賢者　古代Ⅱ　地中海世界の叡智」pp.569-602），コラム「初期キリスト教と古代思想」（同 pp.607-608），中央公論新社，2007.10.
＜吉森（秋山）佳奈子＞
④吉森（秋山）佳奈子「『河海抄』の光源氏」『テーマで読む源氏物語論 3 歴史・文化との交差　語り手・書き手・作者』，勉誠出版，105-132，2008.10.
⑤吉森（秋山）佳奈子「研究論文からみる源氏物語と紫式部　研究の諸相　伊井春樹著「細流抄から明星抄へ－能登送付本「源氏聞書」の周辺－」『『源氏物語と紫式部　研究の軌跡』，角川学芸出版，403-409，2008.8.
⑥吉森（秋山）佳奈子「古注釈・梗概書」『講座源氏物語　第四巻　鎌倉・室町時代の源氏物語』，おうふう，143-165，2007.10.

６．研究組織

(1)研究代表者
秋山　学（AKIYAMA MANABU）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：18520169

(2)研究代表者
秋山　佳奈子（AKIYAMA KANAKO）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10302829